

## 彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十三の本文の位置づけ

中 根 千 絵

### はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた<sup>1)</sup>。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。

巻一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということ<sup>2)</sup>を述べた。巻二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせい<sup>3)</sup>か、古態を残すとされる東大本甲、東大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。巻三・巻六・巻十では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のように、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごと

の分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたくとした。<sup>(4)</sup> 卷四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これらで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、卷四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならないこととなった。<sup>(5)</sup> 卷五の場合は、内閣文庫本Bとの一致度は他の流布本と同じ程度である。卷五、卷七、卷九では、卷二と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。但し、卷五、卷七では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、固有名詞等については、古本系諸本に依っており、これは卷四と同じである。<sup>(6)</sup> また、卷十一・卷十二では内閣文庫本Bにおいて、出典等による補入がある部分については、その表現は一致しない。こうしたことから、彦根城博物館本は、内閣文庫本Bより前に成立した写本である可能性が高いと考えた。<sup>(7)</sup> 卷十二の分析においては、さらに、内閣文庫本B、Cおよび野村本は校訂本文を目指した書物であることを明らかとした。また、卷十二においては、彦根城博物館本のみが最も古い鈴鹿本の表記の一部を残していることも指摘した。<sup>(8)</sup>

卷十三についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』卷十三の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

### 彦根城博物館所蔵『今昔物語』卷十三の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本

と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本(東大本甲)【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると思われることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】  
北―東北大本 実―実践女子大本 国―國學院大本 野―野村本 以上、古本 乙―東大本乙 A―内閣文庫本A  
B―内閣文庫本B C―内閣文庫本C 以上流布本 彦―彦根城博物館所蔵本  
大―旧日本古典文学大系

### 卷十三の底本は東大本甲

#### 卷十三目録

二〇五 法華語(第十四) 底北実国乙(三二・三六・四一)も同じ

免虵難語(第一七) 実国乙ABC(実国乙ABCは蛇)

誦法花靈験語 乙

(第二二)

基燈聖人(第二五) 底北実国乙

破戒僧(第三七) 底北実国乙

持経者(第三九)

乙ABC

卷十三第一話

二〇六 10 箒

大

14 卷返シテ

国乙ABC

16 鳥ノ音リテ

乙AB

17 来リ給ヘルソ

乙ABC

二〇七 5 心ニ任セテ聖人

諸本欠字「心ニ任セテ□聖人」大  
B本「坐ス敷」と朱補。

10 耄也ト

乙ABC

14 不知ラ

A

14 随遂

大

二〇八 2 牛頭

諸

5 曙

諸

6 異類輩ヲ

★「異類ノ輩ヲ」底実「異類ノ輩ヲ」北大「異類ノ輩ノ」国「異類輩」乙「異類輩

モ」AC「異類ノ輩モ」B

9 返ナムト

乙ABC

11 虚空ニ飛

乙AC(A以外の飛は異体)

13 首ヲ仰テ

諸(底北美国乙の仰は草体)

卷十三第二話

二〇九 1 菜ヲ食ヲ

4 音計髣ニ

5 走り求ル

8 籠テ行フ

9 仙人ノ云ク

9 暫ク

9 人間ノ氣

11 隔テ宿ヌ

12 此レヲ聞ユ

12 已ラムト

二一〇 4 餘ノ所ニ

4 寄ス

7 尋子来レル

10 如此トナム

★ 「菜ヲ食テ」底北実国大「菜ヲ食リ」乙「菜ヲ食シテ」A B C

北乙

乙 A B C

乙 A (乙 A は籠)

底北実国

底北実国乙

乙 A B C

乙

乙

C 「亡ラヌラムト」底北実国「亡ラムト」乙 A (以上 亡は異体)「止ラムト」B

「亡ビヌラムト」大

乙 A B C

乙 A B C

★ 「尋ネ来レル」底北実国乙大「尋子来レハ」A B C

乙 A B C

卷十三第三話

二一〇 16 幼ヨリ

16 道心ノミ

国乙 A B C 大「初ヨリ」底北実(幼と訂)

乙 A B C





- |       |          |                                 |
|-------|----------|---------------------------------|
| 6     | 佛道ヲ      | 諸大                              |
| 9     | 供給スルヲ    | 諸大 「ニルヲ」底                       |
| 12    | 隨喜スル故ニ   | 乙ABC                            |
| 17    | 慕悪ノ      | 諸大                              |
| 17    | 数月経テ     | ★ 「数日経テ」ABC 「数日ヲ経テ」底北実国乙        |
| 二二五 1 | 人里ニ      | 実国乙ABC 「人口里ニ」底北大                |
| 1     | 如クシテ     | 乙ABC                            |
| 1     | 悟ヲ驚テ     | 乙ABC                            |
| 2     | 我レ夫ヲ     | 乙AC                             |
| 3     | 存スル      | 乙ABC                            |
| 5     | 致ス所也     | 乙AB 「致スガ所也」底北実国大 Cは脱            |
| 6     | 語り傳ヘタルトヤ | ABC 「語り傳タルトカヤ」底北実国大 「語り傳ヘタルト也」乙 |
- 卷十三第五話
- |        |     |   |
|--------|-----|---|
| 二二五 10 | 幼シテ | 乙ABC  |
| 12     | 庵室ヲ | AB 「庵室ヲ」底北実国大 (庵は異体) 「庵室」C 「庵」は「庵」もしくは、その異体「菴」の省文。」 |
| 13     | 止観  | 大 底本の観は異体字 (即ち尔×見)                                  |
| 17     | 人   | AC<br>大 「傍観者ヲ指す。この事を理解する能わざりしB本は「聖人」と訂。」            |





卷十三第七話

二二八 5 □ 郡ノ人也

6 花採ミ

8 始テ

8 行テ心ニ思ハク

10 供養メ後

11 令ム決セ

11 一月一度二度

13 多寶ノ塔ヲ

13 敬イ礼ム間

14 天帝尺ニ

17 経ヲハ

二二九 1 積ミ満奉レハ也

5 生セル人也

卷十三第八話

二二九 10 法花経ヲ

10 怠ル事

「□」ノ郡ノ人也」大 諸本欠字。

乙 ABC

諸

実国 ABC 「行テ心ハク」乙 「行テ□心ニ」底北大

乙 AC (乙 AC はシテ)

乙

ABC

「多タ寶ノ塔ヲ」大 「タは「多」の全訓すてがな。之を理解し得ざる底・実の二本は、タに「非也」と傍注し、北本は「非」を本文に竄入せり。流布本の之を逸したるは例の通り。」

乙 ABC

底北 AC

乙 ABC

AC

底北実国乙

乙 ABC

乙

11	无カリケル	A B C
11	罵リ罰ツ事ソ	底北実国乙
12	柿ノ木ニ	A B C
13	苜テ	「苜テ」乙 A B C
15	年老タル僧ノ	北実国乙 A C
16	計へ	諸
二二〇	汝チ	底北実国乙
1	積置ケル	諸(底の積は変 旁を貴につくる)
1	讀誦セル所ノ	底北実国
1	法性寺ニテ	乙 A B C
4	勘當セシ時	乙 A B C
5	増へ	乙 A B C (乙 A B C はシテ)
9	嗔恚ヲ不發トナム	「嗔恚ヲ不發トナム」諸底大
卷十三第九話		
二二〇	不斷セ	乙 A B C
16	發心ヲテハ	底北実国
16	服セムト	諸(底の服は変 旁を民に作る)
16	令服メケリ	乙 A B C
二二二	熊	A C 大「熊」諸 諸本「熊」に作るを A・C 両本によりて訂。

	2	或ル時ニ	乙 A B C
	3	病ヒ煩惱ム	A B C
	5	依テ云事ヲ	A B C
	6	徧ク	「徧ク」 B
	8	此ヲ見	乙 A B C
	9	此ノ経	乙 A C 「此経」 B 「此ノ経ヲ」 底北実国
	10	机ニ事	乙 A C
	13	死タル	乙 A B C
	14	百千万ノ狗	底北実国
	15	音有テ云	乙 A C
	15	皆	乙 A B C
	15	推ニ化セル	乙 A C
	16	結縁セムカ為	A B C
	二二二	二月ノ十五日ノ	乙 A B C
	4	寶塔品	乙 A B C (乙 A B C は寶)
卷十三第十話			
	二二二	犯シテ成メ	乙 A C (乙 A C はシテ)
15	15	苦抜カム	乙 A B C
17	17	或貴所ニ入テ	乙 A B C 「或ル貴所ニハ入テ」 底北実国 (ハに (イ) 无と傍書)

	17	金銀ノ	諸（底の銀は食偏 朱訂）
	17	薄堂ニ行テ	北美国乙A
二二三	4	侶テ	諸（底の旁は朱筆）
	7	棒テ獄門ニ	A B C
	7	何ノ故ニ	A B C
	8	毎日	乙A B C
	9	云ヘトモ	乙A B C 「云フトモ」底北美国大
	15	美麗ナル	乙A B C 「美麗ナル」底北美国大 正字は「麗」
	16	救ハムカ為	乙A B C
	17	犯シテ成シ	底北美国 B C
二二四	2	髑髏	底北美国 乙大 「髑髏ハ」A B C
	5	置ケリ	乙A B C
	5	髑髏 <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">二字分欠</span> 誦シ	「髑髏誦シケリト」諸（髑の下 底北美国はかな一字分位、乙A B Cは二字分空白）
		ケリト	
	7	云ケリ	乙
卷十三第十一話			
二二四	11	成ニケリ	諸
	12	熊野詣ケルニ	A B C
	12	完ノ皆山	乙A C

卷十三第十二話

14 瞻テ後

乙

14 近ク寄テ

実国乙ABC

16 思

乙ABC

二二五 1 其ノ所ニ

「□其ノ所ニ」大 「諸本空格無きも、北本の朱傍によりて補。」

3 本源ヲ

乙ABC

5 名ヲハ

諸

5 不慮ナル外ニ

乙ABC

6 有リテ

乙ABC

11 生レニケリト

北実国ABC

二二五 16 佛道ヲ

乙ABC

二二六 1 音ヲ以テ

諸

2 仙人ナトノ

乙ABC

3 聞ユル

諸

4 早ウ

乙ABC

6 是ヌ

乙「走ヌ」ABC 「立テ走ヌ」底北実国大

7 立ツニ

底北実国乙

7 汜々ト成テ

「汜々ト成テ」底実北乙ABC大 「汜々成テ」国（以上 汜は異体、北乙ABCは汜に近し、底は汜と朱傍）「茫々ト成テ」C

- |         |        |         |   |
|---------|--------|---------|---|
|         | 8      | 多ク年ヲ    | 乙 A B C   |
|         | 9      | 發ス事无ニ   | 乙 A B C   |
|         | 9      | 男カト     | 底北実国乙   |
|         | 12     | 弟ノ聞テ    | 底乙 A C (底は子と朱傍)   |
|         | 13     | 何許ナルヲヤ  | 乙 A B C (Cの許は計)   |
| 卷十三第十三話 |        |         |   |
|         | 二二七 1  | 其ノ寺ノ    | 諸   |
|         | 6      | 護人有リ    | 乙 A B C   |
|         | 7      | 本國ノ中ノ   | 乙 A B C   |
|         | 8      | 善勸メ     | 乙 A B C   |
|         | 8      | 止テ〔脱〕出家 | 〔止メテ〔衆生ヲ利益セヨ〕ト宣テ、返シ遣セルナリ〕ト語ル。此ノ事ヲ聞ク人、多ク悪心ヲ止メテ〕出家〕大乙 A B Cは脱 |
| 卷十三第十四話 |        |         |   |
|         | 二二七 17 | 寤寐ニ     | 〔寤寐ニ〕諸(寤は変、底は牀を木偏、北は木偏に作る、底は朱訂)                             |
|         | 二二八 3  | 食物有ル時ハ  | 乙 A B C   |
|         | 8      | 後世并ノ為也シ | 乙   |
|         | 9      | 誦ル      | 乙 A B C   |

10 責ミ喜テ

乙ABC

11 如此ク

ABC

12 法華讀誦ノ

底北実国乙(底北実国乙は花)

14 法華経誦ス

乙ABC(乙ABCは花)

16 讀誦スルカニ依テ

乙AB

卷十三第十五話

二二九 幾ク程ヲ

乙

6 懐妊必

★「懐任シテ」底北実国大「懐妊シテ」乙ABC

7 習フニ

諸大

10 愛岩護

底北実国乙A「愛岩護」BC大

14 人ト見ルト

乙ABC

15 近付ク

乙ABC「□レ近付ク」底北実国大

15 随ヒフ

★「随フ」ABC「随ヒ□フ」底実国乙大「随シ□ク」北

二三〇 1 失シ□仁鏡聖人

乙

2 昇ヌトソ見ケル

実乙AC

卷十三第十六話

二三〇 8 實ニ

ABC

8 懇祈請必

★「懇ニ祈請シテ」乙ABC「強ニ祈請シテ」底北実国大





卷十三第十八話

二三二 14 二ノ目

二三三 2 暫ク居タレハ

底北実国乙

乙ABC 「暫ク居タレ」底北実国大（底の暫は変 非十日の如く作る）「命令表現「居タレ」を、流布本「居タレハ」に誤る。」

3 迷ヒナムト

★ 「迷ヒナムトスト」底実国乙B大 「迷ヒナムトスル」北 「迷ヒナムスト」AC

7 菜ヲ

「菜ヲ」底北実国AB大（葉は異体、彦Bはその変 草冠十糸に作る）「菜ヲ」乙C

8 歎テ

底北実国乙

9 覚驚ヌ

乙AB

12 取ラム

実国乙C 「取ラル」A 「集メ」B 「収ツ」北 「収ツラム」底（収ッに取ッと朱傍

「取ツラム」大 底本傍書により訂。

16 何者ノ

乙ABC

17 住持ノ僧

乙ABC

二三四 2 此レヲ不（脱）聞

「此レヲ不（知ズシテ）此レヲ」聞「大

（二三四 2 ～ 二三五 10

まで脱）

卷十三第十九話

二三四 8 標目欠

平願持経者誦法花経免死語第十九

二三五 10 且ハ泣ク

A（Aのくは泣ク）

卷十三第二十話

二三五 誦法華經

底乙ABC (底乙ABCは花)

二三六 1 不断セ

乙BC

2 有ル間

ABC

4 其後ニ

乙ABC

6 打責

乙ABC

8 横様ノ難ニ更ニ會

乙ABC

10 恠テ

乙ABC

11 夢見タル

乙ABC

15 為ル間

乙ABC

16 无道テ

乙

17 日ヲ不隔ベ

乙 (乙はシテ)

二三七 1 懈怠无シ

乙ABC

卷十三第二十一話

二三七 5 誦法華經

乙ABC (乙ABCは花)

7 幼テ

ABC

11 得上摩他

乙ABC

11 與諸菩薩俱

実国乙ABC (Aの與は興)

15 搔消ツ様ニ

乙ABC

- 15 川ヲ渡テ 北乙ABC 「渡キ」底実国大
- 17 熊野ヨリ 乙ABC
- 二三八 5 長圓ニ与ヘテ 底北実国
- 8 法華ヲ ABC (ABCは花)
- 8 誦スル夢 乙
- 11 如此ク 乙ABC
- 12 矢ニケルトナム 乙ABC
- 卷十三第二十二話
- 二三八 17 見テ 乙ABC
- 二三九 3 而ルニ 諸大「而ル」底「底本「二」を脱せるを諸本によりて補。」
- 8 痛ヲ以テ 乙ABC
- 11 噫テ 底北実国乙
- 卷十三第二十三話
- 二四〇 1 越後 乙ABC
- 1 右ノ志郡 「古志ノ郡」大
- 3 三時ニ必ス 乙ABC
- 8 来リ給ヘルカト 乙ABC
- 9 薪ヲ捨テ 底北(底は拾と朱訂)

9 薬ヲ  
AC「菓ヲ」B「菜」底実国乙「菜」北「葉ヲ」大  
14 護法ノ  
諸

卷十三第二十四話

二四一 3 世ニ一宿ノ聖人ト云  
底北実国

7 如此ク  
底北実国

8 不知ヌ童  
底北実国乙

8 来テ水ヲ  
乙ABC

9 有レ人ト  
底実乙(底実はレ点を附す)

卷十三第二十五話

二四二 4 敬ヒ  
諸

7 讀誦セシ  
乙BC

卷十三第二十六話

二四二 14 營シテ  
「營シテ」底諸「營ムデ」大 B本は「營シテ」を訂。

15 人ノヲ語ヒテ  
ABC「一人ノ□ヲ語ヒテ」底北実国大「人ヲ語ヒテ」乙

17 法華ヲ  
ABC

二四三 5 奉テモ  
諸

卷十三第二十七話

二四三 10 法華ノ中ニ

乙ABC (乙ABCは花)

12 持チ思ヒテ

ABC

13 玄常

乙ABC

13 不着セ

乙C

15 足ニモ

ABC

16 不避世ノ人

乙ABC (避ノ下乙には半字分位空白あり) 「不避ズ□世ノ人」底北実国大

二四四 1 幡磨

諸大「幡磨」乙「手偏を、中偏もしくは立心偏に作るのは、字類抄にも見える異体字。」

1 雪彦山ニ

ABC 「雪房山ニ」北「□雪彦山ニ」底実国大

2 一果ノ

底北実国乙

3 近付テ

乙ABC

4 相スル

乙ABC

7 参ムト

ABC

7 男ヲ

乙AC

卷十三第二十八話

二四四 12 長□聖人ノ

乙ABC 「長験聖人ノ」北「長延聖人ノ」底実国大 (底は延に「欠験記ニ依テ補フ」と朱注)

14 若クヨリ

底北実国乙大「若キヨリ」ABC

	15	計へ不可令ス	乙 A C
	16	甲曹	底実国 A 大「甲曹」北 B C 「甲曹」乙「曹」は「曹」の異体字。
	17	不離レ	「不離ズ」諸大 諸本かく作る。「トを省略した語法と見る。」
二四五	4	持テル所ノ	実国乙 A B C
	5	貴ミケリトナム	国乙 A B C
卷十三第二十九話			
二四五	10	受ケ	A B C
	13	誦シ	乙 A B C
	14	痛愈ル	乙 A B C
	15	因縁ヲ以テ	乙 A B C
	17	魂也ト云トモ	乙 A B C
二四六	3	藪ノ中ニ□ニ	諸大
	3	音有リ	諸
卷十三第三十話			
二四七	7	弃置シツ	北乙「弃置レツ」諸大「上の「弟子ノ有テ」で主格表現とすれば、このレは不審。」
	7	誦シ通スト	底北実国乙

卷十三第三十一話

二四七 15 讀誦スル間

16 貴テ讚ル事

二四八 3 其レト

4 生レシム

9 昔々シ

10 在マサ

12 高ク

12 咄ニ

乙ABC

乙ABC

諸大 北本は「ト」に「ニイ」と朱傍、B本は「其レ」に朱圈を附する。

★「生レムト」ABC大「生レシム」底北実国大「至レント」乙

ABC

乙A

ABC

「慥ニ」底北実国大「慥」乙「慥」A「慥ニ」BC

卷十三第三十二話

二四九 4 持チ奉ル

9 分チ宛テツ

12 幾ク程ヲ

乙ABC

★「分チ充テツ」底北実国乙大「分ケ宛テツ」B「分ケ死テツ」AC

乙ABC

卷十三第三十三話

二四九 17 今昔□天皇

二五〇 1 毎日

11 講スルニ依テ

12 聞ヘ有リ

諸大

乙ABC

ABC

乙ABC





- |          |          |                          |
|----------|----------|--------------------------|
| 12       | 夜曙ヌレハ    | 乙A                       |
| 二五三 2    | 勤メツ      | ★「勤メツ」諸大(底のツは朱筆)         |
| 3        | 此レ此樹ノ下ノ  | 乙                        |
| 4        | 前役トス     | 北乙B                      |
| 4        | 不共奉来ハ    | 乙AC                      |
| 4        | 筥ヲ以テ     | 乙ABC                     |
| 9        | 第四日ニ     | 乙ABC                     |
| 10       | 前翁       | 流布本「前ノ翁ナ」古本大 ナは「翁」の捨てがな。 |
| 卷十三第三十五話 |          |                          |
| 二五四 13   | 源尊ヲ将出テ   | 諸「源尊ノ将出テ」底大              |
| 二五五 2    | 取後ノ時ニ至ルニ | ABC                      |
| 2        | 聊モ       | 乙ABC                     |
| 卷十三第三十六話 |          |                          |
| 二五五 16   | 誦セシ      | 乙ABC                     |
| 17       | 未夕       | 乙ABC                     |
| 二五六 5    | 微妙ノ音ヲ出シテ | 北乙ABC                    |
| 12       | 法華経讀誦ノ   | ABC                      |
| 14       | 聞繼ニナム    | 諸「聞繼テ」B(北本の傍書も同じ)        |

卷十三第三十七話

二五七 1 其ノ寺

諸（底は寺の下にニと朱補）

2 一人ノ僧

乙ABC

3 腰刀釵ヲ

国乙ABC

6 毎日

乙ABC

7 其ノ宿ニ

乙ABC 「其ノ車宿ニ」古本大 今の車庫に当たる。

8 病受テ

乙ABC

9 瀬テ

底美国乙大（底は漱と朱傍）「漱」北「洒テ」ABC

「瀬」は「漱」の俗字。

9 得入无道

乙ABC

11 離ムト

★「離ムヌトゾ」底北美国大「離レヌト」乙ABC

卷十三第三十八話

二五七 16 其国

乙AC

二五八 1 云テ

乙ABC

1 云テ本ヨリ

「云テ出デ、本ヨリ」大 流布本「出デ、」を欠く。

2 不告ヌ様ニ

北乙ABC

3 搥ニ

「搥ニ」底北美国「搥ニ」乙「搥ニ」A「搥ニ」BC

3 拈ムナムト

乙ABC 「拈ムナド」底北美国大（拈は木偏）

4 □カセテ

諸大

7 男カト云程ニ

乙 A B C

8 髓ニ

乙

8 幼ノ如ク

底北実国乙(底北は幻と朱傍)

9 二足ノ械ヲ

乙 A B C

9 皆抜ケ

北実国乙 A C 「皆抜キ」底大「皆抜ク」 B

11 夜曙ヌレト

乙 C

15 夜曙ヲ

★ 「夜曙テ」底北実国大「夜曙テ」乙 A B C

15 拈ヅ置タル

C (Cはシテ)

16 寄ニ

乙 A C

17 此レヲ聞テ

諸 Cは脱

二五九 1 構フル事

乙 A B

4 宣ヘト

乙 A B C

5 助ケ給ヒテハ

乙 B C

5 告ケヌ也ト

★ 「告ケヌ也ト」乙 A B C 「告ケ候也ト」底北実国大(候は草体)

卷十三第三十九話

二五九 12 持者

底北実国乙

13 法花ヲ

乙 A B C

二六〇 3 供断ヲ

乙 A B C

5 時既ニ過テ

乙 A B C 「時ニ既ニ過テ」底北実国大

卷十三第四十話

- 6 法嚴聖人ニ  
乙ABC 「古本かく作るが、やや抵抗を感じる語法の為か、流布本は「二」を欠く。「時二」は「時ニオイテ」の意。」
- 6 持来ラムト為ル間ニ  
諸
- 9 其ノ時  
乙AC
- 二六一 3 崇<sub>レ</sub>貴ヌル  
ABC (ABCはシテ)
- 5 名付テ  
諸
- 12 勝負ヲ  
諸大(底は負に劣イと傍書 実国は少十貝と朱傍)「勝省ヲ」北
- 13 法華ヲ弃テ  
乙ABC (乙ABCは花)
- 17 取勝申シテ云ク  
乙AC
- 二六二 2 田ハ  
諸大「由ハ」底(田と朱傍) 底本、「由」に作るを、諸本によりて訂。
- 7 壺  
「壺」大 底本の字体は、下に連火を増画。
- 8 其ノ中ヲ  
乙ABC 「破テ其ノ中ヲ」底北実国大
- 8 精ケタル  
乙ABC
- 10 破テ〔脱〕見シム  
「破テ〔見ルニ、每瓠ニ皆如此シ。爰ニ、法蓮聖、喜ビ悲テ郷ノ諸ノ人ニ告テ、此レヲ令〕見シム」大
- 12 一□果ノ  
底北実国乙
- 12 送遣ス  
乙ABC

14 人皆心ニ任セテ

底北実国乙(乙の任は住)

卷十三第四十一話

二六三 3 二人ノ聖

乙 A B C

7 経

乙 A B C

10 行キタル

A B C 乙は脱

10 語ルニ

乙 A B C

15 祖ニシタル

諸

二六四 2 持者

乙 A B C

3 送ル也

乙 A B C

3 彼ノ聖ヲ

乙 A B C

8 □食ヲ

乙 A B C

9 随ヒケリ

乙 A B C

卷十三第四十二話

二六五 1 道心發ル時モ

底北実国乙(底北実国乙は蒞)

1 恐レ□ト云ヘトモ

諸大

2 難捨キニ

乙 A B C

3 講仙

乙 A B C

8 愛シテ

北乙 A B C



卷十三第四十四話

二六八 5 不敬セ

5 遊女偏等ノ

6 歌ヲ

6 取り仕ヒテ

7 酒□ヲ

7 日ヲ送ル間

11 法華経ヲ聴聞ス

13 身ニ痛ヲ受テ

17 不可云尽ス

二六九 2 講セシヲ

4 生リシ時ノ

8 疎キ事歎キ悲テ

9 五卷ノ日ニ

11 諸ノ人

12 父夢ニ

12 汚タル

16 生セリ也ト

16 死ヌル事ノ聞クニ

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A C

諸(底はノにヲと朱傍)

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

諸大

乙 A B C

乙 A B C

底乙 A B C (底は痛を病と朱訂)

諸(底の盡は変 盡ス朱傍)

乙 A B C 「講ゼシニ」底北実国大

底北実国乙



6	如此クノ苦ニ	底北実国乙
6	預カラシヤハ	A
8	託テ	乙ABC
10	妻ニ託 <del>レ</del> 云ク	乙ABC (乙ABCはシテ)
12	欺用シテ	諸大
14	可止シトナム	底北実国

## おわりに

『今昔物語』卷十三の本文の異同を見ると、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、実践女子大本、國學院大本と一致する箇所は多くないという結果が得られた。また、これまでの巻では、内閣文庫本Bの表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式と同じ傾向にあったが、卷十三の場合は、B本のみと重なる箇所は見られなかった。代わりに、東大本乙が古本系と表現が一致する場合、流布本系と表現が一致する場合のどちらにおいても、彦根本と一致する箇所が多いことが認められた。両本の表現の全てが一致するというわけではないことから、直接の書承関係があるとはいえないものの、彦根本が乙本と同系統の本文を引き写した可能性、あるいは、その逆の可能性が考えられる。例えば、第十二話は、「是ヌ」という表現で両本の表現は一致するが、その他の諸本を見ると、流布本系は「走ヌ」、古本系は「立テ走ヌ」となっており、内容から判断すれば意味の通じがたい部分において、表現が一致していることがわかる。また、第十八話の「取ラム」においても乙本、C本、実践女子大本、國學院大本は同様の記述だが、B本は「集メ」、東北大本は「取ツラム」、東大本甲は「取ツ」に「取ッ」の朱傍が記されており、B本が通じない意を正す為に校訂した本と考え除外するとすれば、その他の「取」を記した諸本は明らかに異なる書承の系統の本

であり、そうした古本、流布本の書承に簡単に割り切れない箇所、乙本との一致が見て取れることは特記すべきことであろう。これまで、乙本に注目した分析は行ってこなかったが、巻によつては、彦根本との関係において改めて見返す必要性もでてきたように思われる。

また、第二十八話の「長延聖人」という固有名詞について、底本である東大本甲では、「欠驗記ニ依テ補フ」という朱傍があり、古本系とされる実践女子大本、國學院大本は、同じ固有名詞を記しているが、流布本系の乙本、A本、B本、C本、また、彦根本も、欠を補わず、空白としていることから、古本系においても校訂がなされないわけではないということが知られる。殊に鈴鹿本のない巻においては、古本系においても記述の揺れが見られることから改めて古本系の校訂の可能性を念頭において、全体像を把握する必要がある。

ひき続き、他の巻においても、その表記、固有名詞の引き写し方について検討を加えていき、彦根城博物館本の諸本における位置づけを明らかにしたい。

## 注

- (1) 中根「未紹介本『今昔物語』(彦根博物館所蔵)についての一考察」(『愛知県立大学説林』53号 二〇〇五年三月)
- (2) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』54号 二〇〇六年三月)
- (3) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』55号 二〇〇七年三月)
- (4) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』56号 二〇〇八年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』2号 二〇一一年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』5号 二〇一四年三月)
- (5) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』57号 二〇〇九年三月)
- (6) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』1号 二〇一〇年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻七の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』3号 二〇一二年三月)、中根「彦根城博

- 物館所蔵『今昔物語』巻九の本文の位置づけ」(愛知県立大学日本文化学部論集) 4号 二〇一三年三月)
- (7) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十一の本文の位置づけ」(愛知県立大学日本文化学部論集) 6号 二〇一五年三月)
- (8) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十二の本文の位置づけ」(愛知県立大学日本文化学部論集) 7号 二〇一六年三月)
- (9) (1)に同じ。